

与謝野晶子訳

源氏物語 花宴卷





源氏物語

花宴

紫式部

與謝野晶子訳

春の夜のもやにそひたる月ならん手枕

かしぬ我が仮ぶしに

(晶子)

二月の二十幾日に紫宸殿ししんでんの桜の宴があつた。玉座の左右に中宮ちゅうぐうと皇太子の御見物の室が設けられた。弘徽殿こきでんの女御にょごは藤壺ふじつぼの宮が

中宮になっておいでになることで、何かのおりごとに不快を感じるのであるが、催し事の見物は好きで、東宮席で陪観していた。日がよく晴れて青空の色、鳥の声も朗らかな気のする南庭を見て親王方、高級官人をはじめとして詩を作る人々は皆探韻をいただいて詩を作った。源氏は、

「春という字を賜わる」

と、自身の得る韻字を披露したが、その声がすでに人よりすぐれていた。次は頭中将で、この順番を晴れがましく思うことであろうと見えたが、きわめて無難に得た韻字を告げた。声づかいに貫目があると思われた。その他の人は臆してしまったようで、態

度も声もものにならぬのが多かった。地下<sup>じげ</sup>の詩人はまして、帝も東宮も詩のよい作家で、またよい批評家でありになったし、そのほかにもすぐれた詩才のある官人の多い時代であつたから、恥ずかしくて、清い広庭に出て行くことが、ちよつとしたことなのであるが難事に思われた。博士<sup>はかせ</sup>などがみすばらしい風采<sup>ふうさい</sup>をしながらも場馴<sup>ばな</sup>れて進退するのにも御同情が寄つたりして、この御覧になる方々はおもしろく思召<sup>おもほしめ</sup>された。奏せられる音楽も特にすぐれた人たちが選ばれていた。春の永日<sup>ながび</sup>がようやく入り日の刻になるころ、春鶯囀<sup>しゅんおうてん</sup>の舞がおもしろく舞われた。源氏の紅葉<sup>もみじ</sup>賀の青海波<sup>せいがい</sup>の巧妙であつたことを忘れがたく思召<sup>おもほしめ</sup>して、東宮が源氏へ挿<sup>かざし</sup>の花

を下賜あそばして、ぜひこの舞に加わるようにと切望あそばされた。辞しがたくて、一振りゆるゆる袖そでを反かえす春鶯囀の一節を源氏も舞ったが、だれも追隨しがたい巧妙さはそれだけにも見えた。左大臣は恨めしいことも忘れて落涙していた。

「頭中将はどうしたか、早く出て舞わぬか」

次いでその仰せがあつて、柳花苑りゅうかえんという曲を、これは源氏のよりも長く、こんなことを予期して稽古がしてあつたか上手じょうずに舞った。それによつて中将は御衣ぎょいを賜わった。花の宴にこのことのあるのを珍しい光栄だと人々は見ていた。高級の官人もしまいには皆舞ったが、暗くなつてからは芸こつせつの巧拙がよくわからなくなつ

た。詩の講ぜられる時にも源氏の作は簡単には済まなかった。句ごとに讃美の声が起こるからである。博士たちもこれを非常によい作だと思った。こんな時にもただただその人が光になっている源氏を、父君陛下がおろそかに思召すわけではない。中宮はすぐれた源氏の美貌がお目にとまるにつけても、東宮の母君の女御がどんな心でこの人を憎みうるのであろうと不思議に思いになり、そのあとではまたこんなふうに関心を持つのもよろしくない心であると思召した。

大かたに花の姿を見ましかばつゆも心のおかれまじやは

こんな歌はだれにもお見せになるはずのものではないが、どうして伝わっているのでしょうか。夜がふけてから南殿の宴は終わった。

公卿こうけいが皆退出するし、中宮と東宮はお住居すまいの御殿へお帰りになつて静かになつた。明るい月が上つてきて、春の夜の御所の中が美しいものになつていった。酔いを帯びた源氏はこのままで宿との直所いどころへはいるのが惜しくなつた。殿上てんじやうの役人たちももう寝やすんでしまつてゐるこんな夜ふけにもし中宮へ接近する機会を拾うことができたらと思つて、源氏は藤壺の御殿をそつとうかがつてみたが、女房を呼び出すような戸口も皆閉じてしまつてあつたので、



歎息<sup>たんそく</sup>しながら、なお物足りない心を満たしたいように弘徽殿の細殿の所へ歩み寄ってみた。三の口があいている。女御は宴会のあとそのまま宿直に上がっていたから、女房たちなどもここには少しよりいらないふうがかわれた。この戸口の奥にあるくるる戸もあいていて、そして人音がない。こうした不用心な時に男も女もあやまった運命へ踏み込むものだと思って源氏は静かに縁側へ上がって中をのぞいた。だれももう寝てしまったらしい。若々しく貴女らしい声で、「朧<sup>おぼろ</sup>月夜に似るものぞなき」と歌いながらこの戸口へ出て来る人があった。源氏はうれしくて突然袖を<sup>そで</sup>とらえた。女はこわいと思うふうで、

「気味が悪い、だれ」

と言ったが、

「何もそんなこわいものではありませんよ」

と源氏は言つて、さらに、

深き夜の哀れを知るも入る月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ

とささやいた。抱いて行つた人を静かに一室へおろしてから三  
の口をしめた。この不謹慎なちんにゆうしゃ闖入者にあきれている女の様子が柔  
らかに美しく感ぜられた。慄ふるえ声で、

「ここに知らぬ人が」

と言っていたが、

「私はもう皆に同意させてあるのだから、お呼びになってもなんにもなりませんよ。静かに話しましょうよ」

この声に源氏であると知って女は少し不気味でなくなった。困りながらも冷淡にしたりはしないと女は思っている。源氏は酔い過ぎていたせいでこのままこの女と別れることを残念に思ったか、女も若々しい一方で抵抗をする力がなかったか、二人は陥るべきところへ落ちた。可憐<sup>かれん</sup>な相手に心の惹<sup>ひ</sup>かれる源氏は、それからほとんどなく明けてゆく夜に別れを促されるのを苦しく思った。女はま

して心を乱していた。

「ぜひ言ってください、だれであるかをね。どんなふうにして手紙を上げたらいいいのか、これきりとはあなただっと思って思わないでしよう」

などと源氏が言うと、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ

という様子にきわめて艶えんな所があつた。

「そう、私の言ったことはあなたのだれであるかを捜す努力を惜しんでいるように聞こえましたね」

と言って、また、

「何れぞと露のやどりをわかむ間に小笹こささが原に風もこそ吹け

私との関係を迷惑に思いにならないのだったら、お隠しになる必要はないじゃありませんか。わざとわからなくするのですか」

と言い切らぬうちに、もう女房たちが起き出して女御を迎えに

行く者、あちらから下がって来る者などが廊下を通るので、落ちて着いていられずに扇だけをあとのしるしに取り替えて源氏はその室を出てしまった。

源氏の桐壺きりつぼには女房がおおぜいいたから、主人が暁に帰った音に目をさました女もあるが、忍び歩きに好意を持たないで、

「いつもいつも、まあよくも続くものですね」

という意味を仲間で肱ひじや手を突き合うことで言って、寝入ったふうを装うていた。寝室にはいったが眠れない源氏であつた。美しい感じの人だつた。女御の妹たちであろうが、処女であつたから五の君か六の君に違いない。太宰帥だざいのそつ親王の夫人や頭中将が愛し

ない四の君などは美人だと聞いたが、かえってそれであつたらおもしろい恋を経験することになるのだろうか、六の君は東宮の後宮へ入れるはずだとか聞いていた、その人であつたら気の毒なことになったというべきである。幾人もある右大臣の娘のどの人であるかを知ることが困難なことであろう。もう逢うまいとは思わぬ様子であつた人が、なぜ手紙を往復させる方法について何ごとも教えなかつたのであろうなどとしきりに考えられるのも心が惹かれているといわねばならない。思いがけぬことの行なわれたに ついても、藤壺にはいつもああした隙がないと、昨夜の弘徽殿のつけこみやすかつたことと比較して主人の女御にいくぶんの軽蔑

の念が起こらないでもなかった。

この日は後宴ごえんであつた。終日そのことに携わつていて源氏はからだの閑暇ひまがなかった。十三絃げんの箏そうの琴の役をこの日は勤めたのである。昨日の宴よりも長閑のどかな気分のどかに満ちていた。中宮は夜明けの時刻に南殿へおいでになつたのである。弘徽殿の有明ありあけの月に別れた人はもう御所を出て行つたであろうかなどと、源氏の心はそのほうへ飛んで行つていた。気のきいた良清よしきよや惟光これみつに命じて見張らせておいたが、源氏が宿直所とのじやうじろのほうへ帰ると、

「ただ今北の御門のほうに早くから来ていました車が皆人を乗せて出てまいるところでございますが、女御さん方の実家の人たち



がそれぞれ行きます中に、四位少将、右中弁などが御前から下がって来てついて行きますのが弘徽殿の実家の方々だと見受けました。ただ女房たちだけの乗ったのではないことはよく知れていまして、そんな車が三台ございました」

と報告をした。源氏は胸のとどろくのを覚えた。どんな方法によつて何女であるかを知ればよいか、父の右大臣にその関係を知<sup>なにじよ</sup>られて婿としてたいそうに待遇されるようになって、それでいいことかどうか。その人の性格も何もまだよく知らないのであるから、結婚をしてしまうのは危険である、そうかといってこのまま関係が進展しないことにも堪えられない、どうすればいい

のかとつくづく物思いをしながら源氏は寝ていた。姫君がどんなに寂しいことだろう、幾日も帰らないのであるからとかわいく二条の院の人を思いやってもいた。取り替えてきた扇は、桜色の薄様を三重に張ったもので、地の濃い所に霞かすんだ月が描かいてあつて、下の流れにもその影が映してある。珍しくはないが貴女きじょの手に使ない馴ならされた跡がなんとなく残っていた。「草の原をば」と言った時の美しい様子が目から去らない源氏は、

世に知らぬこここそすれ有明の月の行方ゆくへを空にまがへて

と扇に書いておいた。

翌朝源氏は、左大臣家へ久しく行かないことも思われながら、二条の院の少女が気がかりで、寄ってなだめておいてから行こうとして自邸のほうへ帰った。二、三日ぶりに見た最初の瞬間にも若紫の美しくなったことが感ぜられた。愛嬌あいきょうがあつて、そしてまた凡人から見いだしがたい貴女らしさを多く備えていた。理想どおりに育て上げようとする源氏の好みにあつていくようである。教育にあたるのが男であるから、いくぶんおとなしさが少なくなりはせぬかと思われて、その点だけを源氏は危あやふんだ。この二、三日間に宮中であつたことを語って聞かせたり、琴を教えたりなど

していて、日が暮れると源氏が出かけるのを、紫の女王は少女心に物足らず思っても、このごろは習慣づけられていて、無理に留めようなどとはしない。

左大臣家の源氏の夫人は例によつてすぐには出て来なかつた。いつまでも座に一人でいてつれづれな源氏は、夫人との間柄に一抹の寂しさを感じて、琴をかき鳴らしながら、「やはらかに寝る夜はなくて」と歌っていた。左大臣が来て、花の宴のおもしろかつたことなどを源氏に話していた。

「私がこの年になるまで、四代の天子の宮廷を見てまいりましたが、今度ほどよい詩がたくさんできたり、音楽のほうの才人がそ

ろっていたりしまして、寿命の延びる気がするようなおもしろさを味わわせていただいたことはありませんでした。ただ今は専門家に名人が多うございますからね、あなたなどは師匠の人選がよろしくてあのおできぶりだったのでしょう。老人までも舞って出たい気がいたしましたよ」

「特に今度のために稽古けいこなどはしませんでした。ただ宮廷付きの中でのよい楽人に参考になることを教えてもらいなどしたただけです。何よりも頭中將の柳花苑りゅうかえんがみごとでした。話になって後世へ伝わる至芸だと思ったのですが、その上あなたがもし当代の礼讃らいさんに一手でも舞を見せてくださいましたら歴史上に残ってこの御代みよ

の誇りになったでしょうが」

こんな話をしていた。弁や中将も出て来て高欄に背中を押しつ  
けながらまた熱心に器楽の合奏を始めた。

ありあけ有明の君は短い夢のようなあの夜を心に思いながら、悩ましく  
日を送っていた。東宮の後宮へこの四月ごろはいることに親たち  
が決めているのが苦悶くもんの原因である。源氏もまったく何人なにびとである  
かの見分けがつかなかったわけではなかったが、右大臣家の何女  
であるかがわからないことであつたし、自分へことさら好意を持  
たない弘徽殿の女御の一族に恋人を求めようと働きかけることは  
せけんてい世間体のよろしくないことであろうとも躊躇ちゆうちゆうされて、  
はんもん煩悶を重ね

ているばかりであつた。

三月の二十日過ぎに右大臣は自邸で弓の勝負の催しをして、親王方をはじめ高官を多く招待した。藤花とうかの宴も続いて同じ日に行なわれることになっているのである。もう桜の盛りは過ぎているのであるが、「ほかの散りなんあとに咲かまし」と教えられてあつたか二本だけよく咲いたのがあつた。新築して外孫の内親王方の裳着もぎに用いて、美しく装飾された客殿があつた。派手はでな邸やしきで何事も皆近代好みであつた。右大臣は源氏の君にも宮中で逢つた日に来会を申し入れたのであるが、その日に美貌の源氏が姿を見せないのを残念に思つて、息子むすこの四位少将を迎えに出した。

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

右大臣から源氏へ贈った歌である。源氏は御所にいた時で、帝みかどにこのことを申し上げた。

「得意なのだね」

帝はお笑いになって、

「使いまでもよこしたのだから行ってやるがいい。孫の内親王たちのために将来兄として力になってもらいたいと願っている大臣の家うちだから」

など仰せられた。ことに美しく装って、ずっと日が暮れてから



待たれて源氏は行つた。桜の色の支那錦しなにしきの直衣のうし、赤紫の下襲したかさねの裾すそを長く引いて、ほかの人は皆正装の袍ほうを着て出ている席へ、艶えんな宮様姿をした源氏が、多数の人に敬意を表されながらはいって行つた。桜の花の美がこの時にわかに減じてしまったように思われた。音楽の遊びも済んでから、夜が少しふけた時分である。源氏は酒の酔いに悩むふうをしながらそつと席を立つた。中央の寝しん殿でんに女一によいちの宮みや、女三の宮が住んでおいでになるのであるが、その東の妻戸の口へ源氏はよりかかっていた。藤ふじはこの縁側と東の対の間の庭に咲いているので、格子は皆上げ渡されていた。御簾みすぎわには女房が並んでいた。その人たちの外へ出している袖口そでぐちの

重なりようの大ぎようさは踏歌とうかの夜の見物席が思われた。今日な  
どのことにつりあつたことではないと見て、趣味の洗練された藤  
壺辺のことがなつかしく源氏には思われた。

「苦しいのにしいられた酒で私は困っています。もったいないこ  
とですがこちらの宮様にはかばっていただく縁故があると思いま  
すから」

妻戸に添った御簾の下から上半身を少し源氏は中へ入れた。

「困ります。あなた様のような尊貴な御身分の方は親類の縁故な  
どをおっしゃるものではございませんでしょう」

と言う女の様子には、重々しさはないが、ただの若い女房とは

思われぬ品のよさと美しい感じのあるのを源氏は認めた。薰物たきものが煙いほどに焚たかれていて、この室内に起たち居いする女の衣摺きぬずれの音がはなやかなものに思われた。奥ゆかしいところは欠けて、派手はでな現代型の贅沢ぜいたくさが見えるのである。令嬢たちが見物のためにこの辺へ出ているので、妻戸がしめられてあつたものらしい。貴女きじょがこんな所へ出ているというようにことに贅意は表されなかったが、さすがに若い源氏としておもしろいことに思われた。この中のだれを恋人と見分けてよいのかと源氏の胸はとどろいた。「扇を取られてからき目を見る」（高麗人こまうどに帯を取られてからき目を見る）戲談しやうたんらしくこう言つて御簾に身を寄せていた。

「変わった高麗人こまうどなのね」

と言う一人は無関係な令嬢なのであろう。何も言わずに時々溜ため息いきの聞こえる人のいるほうへ源氏は寄って行って、几帳きちよう越しに手をとらえて、

「あづさ弓ゆみいるさの山にまどふかなほの見し月の影や見ゆると

なぜでしょう」

と当て推量に言うと、その人も感情をおさえかねたか、

心かたいる方かたなりませば弓張ゆみはりの月なき空に迷はましやは

と返辞こきでんをした。弘徽殿こうきでんの月夜に聞いたのと同じ声である。源氏  
はうれしくてならないのであるが。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---